

# 防人歌の位置

松田章一

今次大戦中と後とにおける防人歌の理解には、見事なる変質があった。こうした変質は防人歌に限ったことではないが、防人歌には何か象徴的に示された悲哀がある。

本稿は、そうした防人歌の位置を眺めながら、高校教材としての防人歌を考えてみるつもりである。

「父は防人の歌を読んでいる私を見て、戦争に行ったことのある者でなければ、歌を本当に理解することはできないと言って笑った。勿論、私は戦争に行った経験などない。だから父の言ったとおり、今から兵役に付くというこの防人の切実なる気持を、本当に身をもつて理解することはできない。たとえ想像はできても。しかし、親子の愛情ほど強いものはない。それは絶ゆることなく人間の心の底に流れていて、何かあるごとに頭をもたげる。……いずれにしても、すべての人間に共通する親子の愛情というものを、兵役に付くときの悲しい気持の中で素直に詠んだところに防人の歌を読んで感動する理由がある。」

これは高校二年生の一学期における、防人歌に対する感想の一部で、万葉・古今・新古今の中より作者一人を選び、その全歌を読んで、適当な視点から評釈論述せよという問題を出した折のものである。参考文献九写しのものも相当あったが、なるべく歌数の少い作

者を捜しながらも、それぞれ独自の視点と理解を示してくれた。更に各クラスで、ガリ刷りの冊子を造ったりしたから、彼らなりの興味を持ったものと思われる。

さて、引用した防人歌へのみずみずしい理解は、もはやこれ以上の補足を必要としないであろう。

「防人歌は別離の悲しさを歌ったものが多い。前途の不安が大きいだけに別離の悲しさもより大きくなるのだらう。父・母・妻子を恋う歌には胸が痛む。いかに彼らにとって防人という任務がつらいものであったかが感じられる。防人歌は彼らの悲しい叫びの歌である。」

この様な情感を持ち、鑑賞でき得るということは、やはり戦後教育の一つの収穫と言えよう。この様に素直に語ることでできる事実を、はるかなる未来のために喜びたいものである。

しかしながら、果してそれだけでよいものであろうかという疑問もまた心のどこかにある。もしや、それは時代の趨勢からなされた理解ではなかったらうか、読み手の恣意的解釈があるのではないだらうか、手ばなしで喜んでよいものであろうか、などという危惧をおさえることはできない。

\*

\*

井上光晴に「ある勤皇少年のこと」という一文がある。その中より満十八才の誕生日、つまり昭和十九年五月十五日の日記を抜粋しておく。

「『醜御盾』（注『満洲国新京芸文社発行雑誌『芸文』掲載、作者工清定）をよむ。奇妙な感じがするのは、作中人物の摂津国主典磐余諸君が伴家持に「いままで年毎に書留めましたる彼ら防人の歌でござりまするが、旅のお慰みにもと諸君存じ、おこがましくもかくの如く、へへへ」といって防人の歌をさし出す場合である。」

しかもその歌は「障敢<sup>サヘナ</sup>ヘヌ勅命<sup>ミコノミツ</sup>ニアレバ悲シ妹<sup>イモ</sup>ガ手枕<sup>テマク</sup>ハナレ奇ニカナシモ」(いなやの言えぬ天子様のご命令とあってみれば、おれは防人として、なつかしいあの妻の手枕を離れて来たものの、われながら、なんとまあ不思議なほど、あの妻がいとわしいわい)というようなものだ。

これはどうしたことか。大伴家持の手元に集められた防人の歌はあわせて一六五首、そのうち「今日ヨリハカヘリミナクテ大君ノ醜御盾ト出デ立ツ我ハ」とうたわれ、大君のために絶対服従を意識したものは、わずかに八三首<sup>(3)</sup>。残りの歌はすべて「カラ衣スソニトリツキ泣ク子ヲ置キテゾ来ヌヤ母ナシニシテ」(おれは旅立ちのとき、おれのこの着物の裾にとりついて、泣きわめきながら離れようともせぬ子どもたちを、なだめすかして後に残してきたよ。その子どもたちは母もない孤児なのに、ああ思えば可哀想なことをしたわい)ふうなものとは驚く。果して、この作者はなにを訴えようとしているのか。判断に苦しむ。

昭和三八年二月一日号の『朝日ジャーナル』に掲載されたこの記事を紹介してくれたのは、創造社の佐々木守であった。井上が「なにを訴えようとしているのか。判断に苦しむ」とした作者の工清定は、私どもの高校時代の恩師であつたからである。

この井上光晴少年時代の疑問は無理からぬことであつて、こころみにその頃の万葉集解説書を開いてみる。

「韓衣裾に取りつき泣く子を置きてぞ来ぬや  
母なしにして

信濃の国から召された防人某の歌です。一首の意は言ふべくもないでせう。母の無い家に、哭いてとりすがる子を無理に置いて、生死も知らぬ戦に赴く、悲壮なことですね。然し一度大君のお召しに接すれば、一身一家は勿論、すべての私事は顧ず、欣然

として死地に入る。これが我が国三千年來の美しい「ますらを」の道です。殉忠報国の大信念です。今次の戦争でもかうした例は実に枚挙に遑がないこととせう。」(『青少年万葉集』神尾克巳、昭和一八年四月刊)

この文の作者神尾克巳は「或る中学に職を奉ずる一介の青年教師」と序文にあるが、工清定もまたこの頃、満州の女学校に奉職していたのである。

両文を比較して、今日の時点で論ずることは易しいところである。一勤皇少年を怒らせた工の姿勢が、戦時下にあつていかに至難な抵抗であつたかということもまた、軽々しく論ずることはできない。

ただ、ここで注意しておきたいことは、勤皇少年であつた当時の井上光晴の義憤は、それなりに肯定されるであろうということである。

第四期国定国語教科書(昭一三)『小学国語読本巻十二』及び第五期(昭一八)『初等科国語八』に「万葉集」と題して、次の様な教材がある。

「今を去る千二百年の昔、東国から徴集された九州方面の守備に向つた兵士の一人が

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と  
出立つわれは

という歌をよんでゐる。「今日以後は、一身一家をかへりみるこ  
となく、いやしい身ながら、大君の御楯となつて、出発するのである。」といふ意味で、まことによく国民の本分、軍人としての  
りっぱな覚悟をあらはした歌である。かういふ兵士や其の家族た  
ちの歌が、万葉集に多く見えてゐる。」

とあり、更に「海行かば水づくかばね山行かば草むすかばね大君の  
辺にこそ死なめかへりみはせじ」を挙げ、「まことに雄々しい精神

を伝へ、忠勇の心が躍動してゐる。万葉集の歌には、かうした国民的感激に満ちあふれたものが多い。」ともいつている。

既にこの頃は、教科書全体が国家主義的、軍事的色彩濃く、国民感情の強力な育成に力が注がれていて、この「万葉集」なども例外ではない。教師用教科書もそれぞれ用意されているが、それを今手にすることができないながらも、小学校高学年に与えようとする意図は充分に知ることができよう。かつまた、そうした教育を受けた児童たちが、幼い心に何を受けとめていったかは、前の井上少年の日記からも窺い知ることができるであろう。

もう一つ例を挙げておこう。『初等科国史上』（昭和一八）の「遣唐使と防人」の中からである。

「このやうに、奈良の御代々々には、東亜の国々がしたしく交つて、其栄の喜びを分つてゐました。しかし、わが国はその間でも、決して国のまもりをおろそかにしなかつたのです。

都や地方の役人たちは、御代の栄えをことほぎながらも、いったん事があればいっさいを捨てて、大君のために死ぬ覚悟をきめてゐました。大伴氏、佐伯氏のやうに「海行かば水づく屍山行かば草むす屍大君のへにこそ死なぬ」と、世々にいひ伝へいひ続け、て来た武人の家もありました。かうした気持は、ただに文武の役人だけではなく、国民全体の心でありました。

筑紫の防備に当る兵卒の防人にも、忠義の心は満ちあふれてゐました。かれらは、生れ故郷の東国から、父母に別れ妻子を置いて、はるばる筑紫へくだって行きました。二度と帰らぬ覚悟をきめ、大君のために喜び勇んで旅立つかれらは、来る日も来る日も筑紫の海を見つめて少しのゆだんも見せなかつたのでした。」

しかしながら、こうした教材の国家管理の激しい中にも、万葉集は本来の位置で理解されてもいたはずである。阿川弘之の『雲の墓

標』にとりあげられた万葉集は、飛行機予備学生たちの精神の故郷であつた。「夜は毎晩、温習の中休みになると、かれらの犬の遠吠えのような、黄色い号令演習の音が聞えて来る。かれらはそのあとすぐ寝るのである。幼い夢を見て眠るのである。万葉集のなかの、乳の匂いのする防人たちの歌をおもひうかべて、自分は胸のせまる感じがする。」という主人公吉野次郎の感想は、阿川弘之や当時の高等教育を受けた学徒の多くの感想であつたに違いない。吉野裕の『防人歌の基礎構造』が刊行されたのは昭和一八年八月であつた。

＊

＊

戦後しばらく、墨ぬり教科書を使用させられた時期があつた。私なども幼な心にこれはかなりショッキングな事件として今に覚えてゐる。何か自分自身を黒くぬりこめてしまつたやうな、後味の悪いものがいつまでも残つていた。やがて、新聞紙教科書に變つた。粗雑な薄黒い新聞紙大の教科書を疊んで、あぶなつかしい手つきで針をとおして製本したことも覚えてゐる。そして所謂戦後の教科書に接したのである。しかし私たちは墨をぬつた先生も見つたようだ。進駐軍に筆で英語を書いてみせたら、ベリーグッドと言つたと話してくれた修身の先生のことを奇妙に覚えてゐる。考えてみれば、戦後、そんな墨ぬりがかなりあつて、どうやらそれがそろそろうすれかけてきたと言えはしないだろうか。神話の復活は、それなりに意味のあることであり、かつ当然必要なことと考えるが、しかし、それがうすれかけた墨の向うにあるものであつたらと思つたと戦慄を禁じ得ないのである。

はじめに危惧と言つたのは、こうしたことと関連する。戦前への反動的立場から、時流にのつた考え方を無批判に現代の高校生達もとつてゐるのではないだろうか。彼らには、意外に類型的な言動や

鋳型に、はめ込まれたまま何ら疑惑に逢着しない思想の持ち主が多いのである。

防人歌もまたそうした時流の中で把えられ理解されてはいはしなかと恐れるのである。後にも示すように一般に哀傷のみを強調する傾向がある。あくまで防人歌そのものとの感応でなくてはならぬはずである。もとよりその感応も万葉時代の歴史的事実的操作をふまえての上のことであるが、次の様な文に接するとやはりぎくりとさせられる。

「華麗な奈良の都の歴史を支えるために犠牲になった庶民の悲しさ、何の飾り気もなく、とても素直に歌われていると思った。」という文の「華麗なる奈良」とか「犠牲になった庶民」などの言葉が安直に書かれているとしたら、こうした形式的発想は、かつての国家主義的な考え方と同質ではないかと疑わずにはいられないのである。

防人歌には、より暗澹たらしめる要素があるのであり、感情にお

	乙 I 19冊	乙 II 20冊	計	中学 16冊
3569		1	1	
3570		2	2	
4322	2	2	4	
4323	1	1	2	1
4325	1	1	2	
4328	2	2	4	
4330		1	1	
4342	2		2	
4343	1	1	2	
4344	2		2	1
4346	11	2	13	1
4352	1		1	
4367		1	1	
4364	2	1	3	
4370		1	1	
4374	1		1	
4375	2		2	
4376		1	1	
4382		1	1	
4385		1	1	
4392		1	1	
4401	5	3	8	
4407		1	1	
4417	1	1	2	
4419		2	2	
4420	1	1	2	1
4424	1		1	
4425	4	2	6	

ばれやすい危険性をより多く内包するようである。もっともこの生徒の文章は次の様に結ばれて私の杞憂を打消してくれた。

「今まで習っていた歴史では、奈良時代は活気溢れる華やかな時代であった。しかし防人の歌をよんではじめて、奈良時代に生きた人々の歴史の陰に隠れたある一面を見たような気がした。」

\* \* \*

今日の高校古典の教科書に、防人歌がどのように採録されているか知りたくて、調べてみた。別表は一八社の教科書出版社の乙Ⅰ・乙Ⅱの教科書からである。

聖賢 父母が頭かき撫で幸くあれていいし言葉ぜ忘れかねつる

四〇一 韓衣裾にとりつき泣く子らをおきてそ来ぬや母なしにして

四〇五 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず

(13冊)  
(8冊)  
(6冊)

などが多くとられている。そして翌三六の「大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母おきて」（四冊）翌三七の「あられ降り鹿島の神を祈りつつすめら軍に吾は米にしを」（一冊）以外は、全て父母をうたい、妻を恋うたものである。

ただ、教科書一冊毎に見ると、わずかに二首か三首であって、それだけで防人歌を授業中に理解することは何としても無理と言うべきであろう。勿論古典教材全てが、デパートのショウウィンドウ的であるのだから、仕方ないこともかもしれない。それにしても、一つの時代の、生命をかけた作品を、バス修学旅行のようにあわただしく通り過ぎねばならないのは、どうした理由からであろう。そこまで言及するつもりはないが、文部省カリキュラムの問題というより、大学の入試にかかわる問題と思われる。なぜに入試問題はあの様に広範な知識を要求しなければならないのであろうか。授業で万葉集の一首を二分か三分で理解しなければならない現実を一度でいいから知ってほしいものである。そしてまた、それが大学入試に起因していることも。結局、自縄自縛を犯しているのは大学それ自体ではなからうか。

と言って、責任を回避するつもりはない。その二首三首の中で、どうかして防人歌の核心にせまるべく努力しているのである。大学志望者のほとんどは、万葉集など入試問題になり得ないことを知って、数皿か何かの内職をしているのであるが。

さて、翌四「父母が頭かき撫で幸くあれといひし言葉せ忘れかねつる」についてA社の教師用指導参考書を見てみよう。

通釈 父母が、わたしの頭をなでて、無事でおいでと言ったことばが、忘れようとして忘れられない。

鑑賞 「頭かきなで」といっていることが、いつの世にも変らぬ親子の姿を打写して心をつ。

現場の教師が必ずしも指導書に頼ることはないと思うが、それにしても、この説明の薄さは如何ともしがたい。その点、B社の指導書は詳しい。A頭かきなで——頭をかきなでて。西角井正慶氏は、「単なる愛撫ではない。なづということは悩（なづ）に關係ある語だが、すべて魂の信仰に基いている無事であらんことを齋う呪方として撫でたのである」（平凡社・『作者別万葉集評釈』第八巻）と説かれた。Vと語釈を示し、鑑賞ではA作者は決して子供ではないのだが、それをしも父母が別れに当たって愛撫したという歌であって、あふれるような親の慈愛が歌われている。内容はありふれたことにすぎないが、作歌の心持の純粋さがこの一首を生かしているのである。Vと書いている。

「作者は決して子供ではない」という一語を示すB社の指導書の態度は重要である。他社の指導書を通覧していないので完全のこととは言えないが、この一首が「頭かきなで」の表現において少年の歌と考えられやすい。「きつとまだ年も若かつたのだらう。父母と三年別れて暮らすのは初めてに違いない。……この人の年がいくつかはつきり分らない。しかし私達とそんなに大差はないはずだ。」と書いた生徒もそう思ったのであろう。正丁の年齢を知っていたらば、そうも考えなかつたであらうから、歴史事実を教えればよいのかも知れない。あるいは、鑑賞の場合は「少年」で充分なのかも知れない。

しかし、この歌が年齢によって、別離の悲嘆感傷が深まると考えて「少年」と理解するなら、やはり根本的な間違いはなからうか。戦時下にあつてこの問題を鋭く追求した吉野裕の業績（10）を忘れてはならない。「頭かき撫で」が、直接の行為を示すものか、あるいはまた西角井正慶の言う呪方であるかの決定は別として、むしろ、そうした問題を教場で考えることに意味がある。安易な感傷で、

安易な理解をすることは慎むべきであろう。

\* \*

『令義解』軍防令に、「凡防人向防、若有家人奴婢及牛馬欲将行<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>聽。謂、若欲<sub>レ</sub>将<sub>レ</sub>妻妾<sub>レ</sub>者亦<sub>レ</sub>預<sub>レ</sub>聽。為<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>征人<sub>レ</sub>故也。」とある。

四七の「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ」の解説に、この条文が引用されているが、それ以外にもこの条文は利用できないだろうか。

『靈異記』中巻の「惡逆子愛妻將殺母謀現報被惡死第三」などを見ると、防人吉志の火麻呂が母を伴って筑紫に出かけていることが知られる。これだけの例で軍防令の条文どおりのことが実行されていたと断ずることは難しいにしても、そうした例がなかったわけではないのである。

これをもう少し拡大して考えてみたい。

万葉集に防人歌が採歌された天平勝宝七年（七五五）二月の東国防人の差遣は、翌々天平宝字元年（七五七）閏八月、廃止された。ところが宝字三年（七五九）三月には、大宰府より不安四ヶ条を奏上、東国防人の復活が要請された。朝廷の答は「衆議不允」としてこれを拒否した。

ついで天平神護二年（七六六）四月、再び大宰府から東国防人復活の要求が出されている。

「勅。修<sub>レ</sub>理陸奥城柵<sub>レ</sub>、多興<sub>レ</sub>東国力役<sub>レ</sub>、事<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>彼此通融各得<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>。今聞、東国防人多留<sub>レ</sub>筑紫<sub>レ</sub>、宜<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>檢括<sub>レ</sub>、且以<sub>レ</sub>配<sub>レ</sub>戍。即随<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>数<sub>レ</sub>、簡<sub>レ</sub>却<sub>レ</sub>六国所<sub>レ</sub>点防人<sub>レ</sub>、具<sub>レ</sub>状奏来、計<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>欠<sub>レ</sub>、差<sub>レ</sub>点東人<sub>レ</sub>、以<sub>レ</sub>填<sub>レ</sub>三千<sub>レ</sub>、斯乃東国勞輕、西兵足。」

この文中、東国の防人が多く筑紫に留まっているという部分を注目したい。

防人たちが留ったのはどの様な事情であつたか、もとより窺い知ることとはできない。「向<sub>レ</sub>防三年、不<sub>レ</sub>計<sub>レ</sub>行程<sub>レ</sub>」「凡防人向<sub>レ</sub>防、各賣<sub>レ</sub>私粮<sub>レ</sub>、自<sub>レ</sub>津発日随<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>公粮<sub>レ</sub>」などの条文、あるいは「番還、在<sub>レ</sub>道有<sub>レ</sub>身患不<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>涉<sub>レ</sub>路者、即付<sub>レ</sub>側近国郡<sub>レ</sub>、給<sub>レ</sub>粮并医藥救療<sub>レ</sub>。云々」などという条文から、私どもは防人たちの長く辛い往反の道中を想像することができるのだが、あるいは防人たちはそうした道中を想つて、帰国をあきらめたものであろうか。はたまた、筑紫の女と結婚してあろうか。天平宝字八年は藤原仲麻呂の乱があつたが、この年はまた全国的な大凶作であり、翌天平神護元年（七六五）も飢饉は全国で打続いた。こうした事情もまた、防人たちを逃留させたものであろうか。

東国防人たちの心情を、万葉巻二十で見ると、実に哀切きわまりない家族への愛着と、遠い任地への不安などである。それが帰国もせず多くの防人たちの逃亡留住となつたのは、いかなる心がわりがあつたのだろうか。

『靈異記』の火麻呂の如く、母を殺してまでも、妻に逢いたいというのが本音ではなかつたのか。「多留」の文字は、何か私どもに不可解の念を起させずにはおかない。

とすれば、帰心のなくなつた防人たちが「妻妾」同伴で着任していたのであろうと考えることによつてのみ、この疑念が晴らされるのではなからうか。そう考えることが、最も妥当性を持つと思われるのである。神護二年四月条の勅答は、東国防人に留っている者を数え、筑前等六国の防人をその数だけ抜き、その上で三千名に満たぬ時は東国から補填する、と読まれる。「多留」の文字の如く、それは相当数と考えねばならない。

しかも、こうした防人はこの時期のみのことではないと推測される。天平九年（七三七）の東国防人停止の折の筑紫国正税帳などに

みえる人数を考えても、帰国者の数は三千名に満たない。岸俊男氏の研究によれば、筑紫国正税帳より、筑紫大津から備前児島までの十日間の食料奢稲一五四八束から、三八七人分と算出。また周防国正税帳（天平十年）から、前般を八〇〇人、中般を九五三人、後般を一二四人の編成として、この年一九〇〇人、前年と合せ約二三〇〇人とされた。更に駿河国正税帳では通過人数を、伊豆二二人、甲斐三九人、相模二三〇人、安房三三人、上総二二三人、下総二七〇人、常陸二六五人、計一〇八二人で、これは東海道筋等を考えるとほぼ周防国正税帳などの人数に合うとされた。

しかしながら、三千名という数には随分と足りないものであり、周防国正税帳によれば、天平十年十二月二十日帰還集団にもれた防人二人が捉えられ、長門国豊浦団五十長凡海部我妹に連れられて上っていることを考えても、逃亡、逃留の防人があって、それもここに見られる二人のみと言ってしまふ訳にはゆかない。

もとより、この推測が成り立つとしても、防人歌そのものは、別段変るわけではない。ただ万葉集に示された、父母や妻を恋うた防人の他に、妻妾を連れ、母を連れて行った防人もあったのであり、防人歌からのみ防人制度を理解しないようにしたいと思うものである。

更につけ加えるなら、母や妻を連れて行けない防人たちがあったのであり、それこそ、自分の私糧を用意するのが精一杯であった東国の現状が、かえってまざまざとうかがわれる、と言っておきたい。

\* \* \*

四三六の「大君の命かしこみ」を慣用句として理解することが普通である。C社の指導書は、「初二句は当時の類句にすぎないが、下句の事実在即した内容によって感銘の深い歌になっている」と述べる。

ている。C社は防人歌として、この一首をのみ採録していて、その態度をかえって面白く感ずる。過去古傷を隠すように、この種の歌を採らない教科書がほとんどなのだ。

「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯といて立つ吾は

これは火長の作である。火というのは十人が一火だから火長は十人の長である。この歌は火長の覚悟で歌われている。この人も火長でなかったらやはり別離の悲しさを歌ったかもしれない。……當時から第二次大戦まで日本の農民は苦しみ続けられてきた。防人はその苦しみのごく一部であった。この農民の苦しみを歌った農民の下手な歌を万葉集に載せた家持はまったく偉いと思う。この様な農民の歌がこれ以後は顧みられなくなったのは残念である。」この高校二年生の文章を昭和一八年の『青少年万葉集』の解説と比べて頂きたい。「醜の御楯」は、利用され得る次元から脱出したとは言えまいか。そして、こうした純粋な感想を私どもは信頼すべきであると言いたい。

ところで、「大君の命かしこみ」を慣用語としながら、「父母」や「妻」や「吾妹子」を類型的発想と指摘する解説は意外と少い。一つの集団の中で、歌に堪能でない防人たちの歌が、「大君の命かしこみ」だけを、上官訓辞の中から引用したとか言うのは片手落ちではなからうか。防人への同情心のあまり、そこに歌われたことを全て、彼ら個々の現実と考えることは如何なものであろう。

もとより、そうした悲しみがなかったとは言わない。しかし、先にも「頭かき撫で」で問題にした様に、享受側の同情からの恣意的解釈がありはしまいか。

東歌を説明するとき、これを個々の歌と言うだろうか。東歌を民間謡曲のいい、労働歌的と言いながら、防人歌の場合は、左注に作者

名があるだけに今日の解釈を与えてしまったのではないだろうか。

防人たちの難波での関心事は、何と言っても故郷の父母妻子であつたろう。防人歌全体がそれを物語っている。しかし、歌にその感情を表現するということは、一つの文学的操作を必要としよう。修辭にもたけず、素朴なまでの感情が、方言などに表れているには違いないが、それにしても、上司を経て、兵部少輔で名声ある大伴家持に進上せられると知ったとき防人たちの胸中に動いたものは、単に父母を想う情だけであつたろうか、あるいはまた悲歎のあまりの防人制度への抗議であつたろうか。

防人たちの胸中には、よりよく詠もうという意識が多少とも動いたと考えられないだろうか。そうした意識が類型的発想に連なるものではなかつただろうか。「大君の命かしこみ」が類型的発想なら、「父母」や「妻」もまたそれに準ずる類型的発想と考えるべきではなからうか。

四三の「わが背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も」の武蔵国の妻服部昔女の歌と、磐余伊美吉諸君が抄写して贈つた四六の歌との同一性は、それが妻の立場からの歌であるとしても、防人歌の類型発想の一つの証明となるのではなからうか。

而して、それら防人の進上歌の半数が拙劣歌として採録されなかつたのは、方言の多いためか、類型的でありすぎたのか、あるいは都風すぎた言葉を使っていたのか、分らないにしても、選ばれた歌もまたそうした欠点をもって、なおかつ家持を感動せしめたとしたのなら、私どもは、そうしたたなさを破って訴えてくる激情を受けとめなければならないのではないか。

防人歌を防人の現実行為とし、哀別離苦の悲嘆を強調するだけの解釈はどうであらう。戦前の国家主義的解釈から解放されたとはいえ、今度は反動的にあまりにも個別的個性的に解し、冷静な学的操

作を忘れたのではないだろうか。

\* \*

とりとめもない感想に終始してしまった。教材をどのように受けとめてゆくか、これは防人歌に限られた問題ではない。あらゆる教材に関して、こうした人揺れVがあるのである。そして、現在決着の方法もなく激しく人揺れVているのである。

もつとも万葉集の生命は、それ自身が持っているものであり、後人の恣意に左右されたいと言つてしまへばそれまでであるが、今眺めた様な解釈が横行した事実を識る時、享受者の姿勢もまた実に重大であることを思うのである。

#### 注

- (1) 『万葉古今新古今の作者達』・竹村修「防人の歌」
- (2) 『万葉古今新古今の作者達』・坂井やえ「防人の歌」
- (3) 八三首という歌数は間違いで、取戴歌は卷二〇に九三首。
- (4) 『井上光晴作品集』第三卷(勳草書房刊)の「解説」に抄録
- (5) 『万葉古今新古今の作者達』・湯上悦子「防人の歌について」
- (6) 前掲書 湯上悦子
- (7) 『高等学校国語科指導資料教材と指導法』(昭四一・文部省刊)による。
- (8) 日本古典文学大系万葉集四(岩波書店刊)の四三四六の頭注に「頭一古くは頭髮。転じて頭、さらに人の上に立つものの意」とあるが、一休何の注記なのか判然としない。
- (9) 前掲書 湯上悦子
- (10) 吉野裕「防人歌の基礎構造」『若い防人の歌』
- (11) 『万葉集大成』11「防人考」岸俊男
- (12) 前掲書 坂井やえ